

続々「子、親を選べず」終章



真之介君は相変わらず学校の勉強はさっぱりでしたが「課外授業」の方では、同じ年の子に比べるとかなり良いポジションに、着けるようになっていました。

そんな真之介君は、

「最近なんやら自分、おとうの味方になってばかりで、これじゃあ少しおかんがかわいそうやなあ」

と思いました。

お母さんの事に目が行ったのは、真之介君がお母さん子だったせいかもしれませんが、以前にお父さんが

「なんでも、その正反対「も」考えてみい。結構おもしろい答えが見つかる「事も」あるし」と言っていた事や

「なんでもどちらか一方が100%という事はない。100%だと思うようになったら、無理にでも100%じゃないように、他のものを咬ました方がええ」

といていたことが何となく頭の隅に残っていたからかもしれません。

そう言う目で見ると、最近のお父さんはちょっと「正し過ぎる」様な気がしました。

正しいのは勿論悪いことではないのですが、時としてそれは相手の柔らかな心を「グサツ」と突いてしまうこともありそうだからです。

真之介君は口には出して言いませんでしたが、時折お父さんから見れば「アツタリまえやあ」で「お前の為を思うて」の善意、それこそ「100%」の言葉が真之介君の「やっぱり未だ子供の心」を「貫通銃創」して目に見えない血を流したことが結構あったからです。

「なあ、おとう。おとうて、案外めっちゃキツツう処、あるわなあ」

「キツツうもなるで。今まで各方面から、散々な目に遭わされてきたからなあ。こうならにや、生き残れなんだあ、だけじゃ」

「おかんは、何故出ていったねえや？」

「出て行かされたのはわしら二人の方やろうが」

「そりゃまあ、そうやけど」

「何が言いたいねえや？」

「おかんも、なんや、可哀想かなあ、おもて」

「おかんが出ていんだのは、飼犬に手をかまれた、おもたのとちゃう、か？
全く思いもよらずわしが、態度で「お手、ポチ拒否宣言」したもののやから。」

仲良しのおかんのおかん、おばあちゃんや誠君ちいのおかんからしたら旦那のクーデター
なんぞ「ありえへん世界」やからなあ」

真之介君はちよつとびっくりして

「クーデターてえ、まるで戦争やね。夫婦てえ、戦争なの？仲良しじゃなくて敵同士なん？」

「ほんまは、対等互恵平等なはずなんやが、何故か我が国では主導権争いになつとるなあ、
どの家でも。そしてどの家でもおかんが勝者になつとる」

真之介君は、やっぱりケツコンはしない方が良いかもなあと改めて思いました。

ポチになるのもイヤだし、家の中のクーデターで毎日毎日陣取り合戦するのもイヤだった
からです。

「大人って面倒いねやなあ。大人ってなかなか素直に白旗、挙げられえひんのやなあ」
と思った後で、大人だけじゃないことに気づきました。

「わしら子供も、そうなつとる。ああ、ヤダヤダッ、疲れてまう」

真之介君は他の子とも、おとうやおかんとも違う大人になろうと思いました。

(おしまい)